

労働者の学校を!!

トマス・ヒューズ、ジョン・ラスキンらの教えた成人教育機関

基督教友愛新聞

発行所：
白十字キリスト教
社会主義研究会
(<http://www.ichtus.net/css>)
発行人：
倉井 香矛哉 (独立系研究者)



写真：現在のロンドン労働者カレッジ
(c) Copyright Stephen Craven
<http://www.geograph.org.uk/photo/549983>

今回は、一八五四年に

労働者の教育を目的として創立されたロンドン労働者カレッジ (Working Men's College) を紹介したい。初代校長はキリスト教社会主義運動を主導した F. D. モーリスであり、美術評論家のジョン・ラスキン、画家・詩人の D. G. ロセッティ、小説家の E. M. フォースターらが教鞭を取った。また、キリスト教社会主義運動のメンバーでもあったトマス・ヒューズは、WMC の教壇に立つ傍ら、一八五七年に小説『トム・ブラウンの学校生活』を執筆し、これが大ベストセラーとなって一躍脚光を浴びた。

労働者の教育・道徳訓練の必要性は、キリスト教社会主義運動が開始される以前から認識されていた。一八四八年九月、キリスト教社会主義の運動家たちは、

Little Ormond Yard の住民のために夜学を設立している。ヒューズはこの頃から運動に参加しているが、当初、オック

スフォードのスポーツマン (ボートやクリケットの選手) として知られていた彼の参加は、周囲の笑いを誘ったという。実際、WMC の二代目校長となるヒューズは、ボクシングやクリケット、フットボールをはじめとするスポーツの指導に熱心であった。同僚や学生にも人気があったという。

ラスキンやロセッティ、その他のラファエロ前派の画家たちが教鞭を取ったこともあり、WMC の教育は広く宣伝された。

F. D. モーリスの理念に基づく

共に働く者 (joint-workers) の共同体

このように特色豊かな成人教育機関として

開講されたロンドン労働者カレッジだが、一見すると、弁護士のラドロ

ーが目指した協同組合運動からキリスト教社会主義者たちが撤退した帰結

のようにも思われる。実際、モーリスらの組合 (アソシエーション) は、WMC が開設された一八五四年の終わりには活動を終了している。しかしながら、この学校は、初代校長のモーリスが運動の当初から抱いていた教育

ものだったのである。

モーリスは、彼の神学思想が「異端」であるとの理由から、一八五三年一〇月にキングズ・カレッジの教授職を罷免されている。しかし、それから程なくして、ロンドン労働者カレッジの創立に至った。その背景には、

神学者としてのモーリスの思想が脈々と伏在している。その中心にあるのは、「神の国」であり、「キリストは世界の実際の根柢である」という確信で

働く者 (joint-workers)

ある。モーリスにとってのキリスト教社会主義は、「神の国」があらゆる人間の現実や関係のうちに「実在」する「真実」であることを宣言するものであり、人間の関係性を掘り下げ、その根柢に「神の秩序」を発見し、人間存在を「再生」させることを目指すものであった。モーリスにとって、人間は、「単なる賃金を受け取る動物」ではなく、それを「支払う動物」でもなく、商品を「生産し交換する」関係でもなかった。階級や環境によらない、「共通の人間性」に属する共に

祈々のことば

1

「聖からぬ聖徒」とされし我なれど 神の言葉に召されて生きよう

倉井香矛哉

二〇一五年一〇月の作歌である。内村鑑三の『ロマ書の研究』第五講に、「聖からざる聖徒」という表現がみられる。ここでいう「聖徒」は、「聖き徒すなわち聖浄無疵の徒を意味する語ではない」という。曰く、「聖徒はハギオスである。完全に聖き者ではない。聖き者のために用いられる者である。」「われらは真に土の器である。価値なき、もろき、やぶれやすき者である。しかし神に聖別せられ

て聖事に用いられる意味において聖徒である。」

ドストエフスキの長篇小説『カラマゾフの兄弟』の主人公、アリョーシャは、正教会の修道僧だが、リーズという女性に想いを寄せる。神に召されて生きる彼ですら、『地上的なカラマゾフの力』からは逃れられない。それでもなお、神に従って生きる決断を通じて、人は真正の自由を得る。——そのような者として歩みたい。

の共同体を建設すること、それが、モーリスの掲げた WMC の崇高な理念だったのである。

【参考文献】

(一) 藤井佳子「Working Men's College の昨日、今日、明日——トマス・ヒューズの F. D. モーリスらと紡いだもう一つの学校物語——」、『英語学英米文学論集』第三十九号 (奈良女子大学英語英米文学会、二〇一三年三月)
(二) 関正勝「イギリスにおける「神の国」思想の展開——キリスト教社会主義運動の中で——」、「キリスト教社会主義運動のなかで」、一九八三年一月

白十字の会・定期読書会

※時間帯変更のお知らせ※

対象回：第 4, 5 回 (5, 6 月)
【18~20 時前後】を予定

理由：主催者の介護職員初任者研修受講のため

主催：白十字キリスト教社会主義研究会

天帳院日記

「どうしてキリスト教社会主義の研究をはじめようと思ったのか、『君自身の問題』が見えてこない」との指摘

をいただいた。その答えは、「自分は労働者階級なのだ」という意識の目覚め、に尽きる。

二〇一〇年代、ソーシャルメディアで多様な人々と交流をはじめた頃、東京の学生たちの華やかさに驚いた。

北九州市で生まれ育った自分の学生時代は、彼らと比べれば、あまりに慎ましかった。とはいえ、僕が工業都市に生まれ育ち、初等教育から大学院までの学費を親に世話してもらったことは否定できない事実である。「お金に換えられない価値がある」という僕の信念は、父親の労働の上に、偽物の象牙の塔を築き上げたにすぎなかった。この壮大なる「放蕩息子」の帰還」の物語を生きた経験は、しかし、今後もお文化的な活動に傾倒するであろう僕の人生を強めることになると思っています。

告知

ドストエフスキー読書会

（第 4 回 白十字の会・定期読書会：キリスト教文学、社会評論）

テキスト：ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』
（新潮文庫）

【プログラム】

開会
倉井香矛哉「キリスト教社会主義概論 4」
参加者一同「ドストエフスキー読書会」
休憩
質疑応答、議論、問題提起
閉会

（全体で 2～3 時間程度を予定）

【その他、参考図書】

イマヌエル・カントの信仰的著作
ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』
ダーフィット・シュトラウス『イエスの生涯』
フォイエルバッハ『キリスト教の本質』
マルクス『資本論』
カール・バルト、パウル・ティリッヒの各著作
19 世紀英国における産業革命とキリスト教社会主義
『新紀元』同人、賀川豊彦らのキリスト教社会主義
内村鑑三、無教会の伝道者たち
その他
（順不同）

日時：2017 年 5 月 27 日（土）18 時～20 時

（途中入退室可。会場は一般の喫茶店ですので、ご都合のよい時間帯にお越し下さい。）

場所：都内喫茶店を予定

※ 今回は、東急東横線沿線（都立大学～自由が丘）の喫茶店での開催を予定しております。
詳細は、書記長の倉井（独立系研究者）から参加希望者の皆様へ個別に連絡いたします。

※本読書会は、学術的関心に基づく有志の集まりです。主催団体名に「キリスト教
社会主義」と銘打っておりますが、「信仰の有無・教派の別」等は一切問いません。

主催：白十字キリスト教社会主義研究会